

八
顛
愚
冥
迷
奇
談
參

特別
14
696
13





696
13

小寺姓

文庫

松園菊丸藏

風も子さの音坐りあはれ
 柳披くも雨交り分をさる
 不体も様も因縁をいふ
 小敷くももれいふと人
 中敷の孫も如きもあはれ
 斗ハ至さるるの事
 大船のち巻ぬいふの事
 海を渡る舟の事
 淡路の事

御覧の... 虎... 兎... 金馬... 大蔵...
御覧の... 虎... 兎... 金馬... 大蔵...
御覧の... 虎... 兎... 金馬... 大蔵...
御覧の... 虎... 兎... 金馬... 大蔵...
御覧の... 虎... 兎... 金馬... 大蔵...

龍... 見... 花... 雨... 馬... 胡馬...
龍... 見... 花... 雨... 馬... 胡馬...
龍... 見... 花... 雨... 馬... 胡馬...
龍... 見... 花... 雨... 馬... 胡馬...
龍... 見... 花... 雨... 馬... 胡馬...

猪をくそを糞の位に引取らば大隈あり
 如猪ありしに於ては下向の頑者も如く
 武者も下向の頑者も如く
 正白の猪の皮は仕業も如く
 名物も如く
 由るに必由の首首ありんらん
 夫十三支の...
 故ありんらん
 難ありんらん
 難ありんらん

会議...
 何と云ふと猪あり
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん
 猪ありんらん

右の元柳原...
 田原米十郎

沙千枝の落十二支のよみ
お名れらるるつひのあはれ
そりて下むまきらぬ

胡椒の味

右意格 宗義父

子不ぶいのあし

中西龍華

坦齊稿

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥
甲子子の日の遊は随ふも
作格物命の崩書為
家より崩宵の天井
崩の大崩下まお
崩壁頭わが崩崩
鐵羽ゆりて
た鹿の術を傳授
縹子衣服の崩羽

書玉の風心経復自育くると飛龍の如く採る巫龍
野田野原の浪化風緒の風結子の珠眼の極風
鷲の毛を採り下つる風ドブを走る水氣火の中を火龍
へ食む龍風の黒蛇の疔疔の大妙薬天龍の矢目の
茶龍の眼もはらへる風結子の牙を房の母風翹の共行
之れを採る龍虎の如くやするも龍の尻の奥の風院奥を真
真の龍風のチチラする香龍の又上品銀風の皮の神水
初級龍龍の皮と花塗龍の皮と真の龍毛の極龍の
龍は茵一葉龍海龍陽一壺龍李一盒去ると三葉
龍の嫁入り日龍龍と居る三葉三葉の龍
わく生を採り極龍の子の若長古龍のヤトはて業と書る

こやべに採る身を採りや風の陰を撮る直は龍砂
麋龍嗜龍瘻小老龍護老龍瘻如く上龍痘龍瘻
乳は皆病者極龍崩龍如龍の耳も此の名を龍の鬚
と三龍の結ひの放のまはる筆もあつて風
雪姫山水の樹の龍之上の龍の栗龍の別名も
利龍の龍龍の一若也田龍化して鶴を龍
別名も龍龍の一件を書る馬琴の龍龍傳来古
子成倉の龍龍龍の中暗く龍の定はる龍の龍乃
陽里アツタトサハ昔中をなたる龍龍捕
致念今南ハ山林風故東ハ松竹風竹の方
くけはる龍龍の龍風馬の尾は龍の龍乃

古くは風鳥の能風身直屬十九月は後石常詩の空室ア稟
風頭風相風く合をる六章 五章より七のれは風冷の事
乃ち竹竿座の香以白風水歸傳言を傳白日風
光風も中く数多る食蛇風隱風能風也父風
山松風能風よ書燈るるもり夜深く環燈鳴
飢風東破の勺窮風却く冷者猫の睡の圓
此の風子の割の時本が子こ子こ初く風子りりト
子に子こここテ白ス

庚子試筆

古風年を刊 右保右

便く在後書

子を此の方より 風を嫁う者よりハ嫁入る風ハ
後傳のふのハ 伏紙をうぬ風 乃ち此の風ハ
風衣冠あり景多風似く東時ハ風の城を傳
玉を傳る大風ありハ 牆を穿ての雲をとも氷の風ハ水
乃ち此の竹の風ハ竹の根をともり 新造ハなるを 赤色の
風もたてし 杖を伝はる風ハ 乃ち此の法也の
馬の尻よりハ 赤の杖の根の痛く如くハ 成る
あつたの春の初まははのよのりりハ 甲よりハ 此
らもハ 今もハ 乃ち此のありハ ぬるハ 乃ち此の
乃ち此の風ハ 乃ち此の風ハ 乃ち此の風ハ

あしと相馬の真初しあまをたてて再とて風の言
あまをたてて相馬の言
あまをたてて相馬の言
あまをたてて相馬の言
あまをたてて相馬の言

右石井の改

五拾遺物箱巻

目録

- ① 牛の腹のわらわら 穂光相馬の箱
- ② 牛の角の人のあまをたてて
- ③ 牛の皮の華鬘をたてて
- ④ 牛の角のあまをたてて
- ⑤ 牛の角のあまをたてて
- ⑥ 牛の角のあまをたてて
- ⑦ 牛の角のあまをたてて
- ⑧ 牛の角のあまをたてて
- ⑨ 牛の角のあまをたてて

十

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

八百四十九年正月五日

倉龍白雲

一 今昔都下流氷小限も前の所成の牛をわかれ居るも
源の教光が所成の牛と相討つる馬と云ふ事

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時
牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

鶏の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

牛の糞の肥に於ては所謂の虚言の時

二 今昔菅原の道實の大臣の屠る物事ありて文道の聖を

牛嶋ウシノシマ又ハ此の日迄ヤクニ化行ハルノ如シクモ...

寛仁天皇の御名... 寬仁天皇の御名は...

美... 美... 美...

東... 東... 東...

七... 七... 七...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

紅... 紅... 紅...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

牛... 牛... 牛...

終つて後世を三交りて其牛のくさるる
牛俤のあつたれあり物事所程く牛の
増を建てるをみる見山より名をた牛をその
増み別と書牛俤の増へて今も俤の里を
増牛の牛の俤あるをいふ俤の里の増
牛俤の山形なりとて関道の守りては
加

牛俤遺物記巻之終

虎

平山順安

京堂龜壽

順送斎談十二支の題は虎とす又配當あり虎音歌の
正すは是の予の社中の名あり俤の當ありは是の
類は俤の予の社中の名あり俤の當ありは是の
對は誇貞虎鬚撫は談れ或人は難くは白御身の
喜はれ虎の竹叢に存すは教養の願を掲げ
若し自勝を思ふ畏人は是下とす物事人の勝る
而已の云々誇る世の居誇の虎の威を以て孤焉
鳥海ありては始る心は勝る
晋の馮婦は虎とて車を引しは安福を腕攘る

敦園虎は社中の奴輩一を猛虎と馳く群手に入らば

一虎の死を其屋を圍うて下莊子二虎を獲りて例ある

暴虎馮河孔子の戒虎兕の相りしや誰過ぞや評

虎の出づる猫も出づれば虎の腹も

考れし浮瑤理本の凶性虎の

三の旨伊勢太神宮の大祓り虎を伐つ條ありは從集

皇國なるを歎き千里の足も借れ唐書に虎の窟も斬り

白虎通も虎の先休也せん虎虎饅頭も虎虎溪の夜を

一盤喫し虎虎藤葛を虎頭香と販入道す只これ虎虎

石も立位明にあつたかどる書れぬ虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎の虎

臣子の讎を虎と殺せし故事 倭漢老慈の一討

夜草供の太子と虎の衛の例も 虎窟の二夜草

楚の方言に於て虎の例も小説家も大満ちる虎の養

患と遺 虎の放の喻 虎を捕り易く虎を放

難く是の成臣養育の詞と之の成るは 高麗唐

の故事の數多し其の上は耳遠くは 切

るん前文もいふ如く我 大皇國も物あり

強しと言ふは高麗の若輩の 正月

一天に誕生し福神の傳海の思ひ 初定

京都の地理の四神相應の上 西の方虎の位長枝の御六

丑寅の鬼の鏡の雲場あり 東の御城虎の

尾張の御殿 虎の御間 藩本 虎

神祖の寅の皇子の比現く 虎の皮を踏

虎の皮の御殿 虎の皮の尾 龍の如く

虎口と切腕四海の 雲

甲斐の猛將武田信虎 越前の名將長尾

大磯遊女の虎の小唄 虎の子里の數

得下二重の任を成る 蘇る南

子前故の殿の心な 虎の名

五月の天より 轟く 雷の輝 虎の皮

虎狼の屋の満る音 虎の姿

河に住水虎ハカワの澄居

櫻の虎の尾集ハカワ河豚 虎耳

雪の下ハ草ハカワ 虎毛の松名ト

式ハカワ 小三馬ト若を替ハカワ

坊屋ハ春管トカワ 虎口ハ三度病ハ音

歴節ハ茶ハ白虎加人カワ 虎園ハカワ

加ハ兼用トカワ 又寅の年寅の月寅の寅の

別限ハ誕生トカワ 女の鮮血ハ痛ハ音

才ハ洋瑠理本ハ合邦トカワ 虎ハ音

長石衛門ハ往宅トカワ 手妻ハ虎古

高カワ 直虎ハ死カワ 阿カワ 虎ハ音

誰カワ 筆トカワ 止カワ 虎ハ音

強ハ相撲トカワ 昔カワ 高カワ 若カワ

虎ハ川 舞カワ 佛説カワ 長談カワ

虎ハ本 虎ハ音 虎ハ音 虎ハ音

虎ハ音 虎ハ音 虎ハ音 虎ハ音

津和野

虎斑の如く又脚を此の語よりえハ虎波羊質
面ハ猿より取休の言日中流るる鶴の文章
虎を畫く物類の言此の語より元より
兼知用由る時ハ虎ハ用ハ如時ハ虎の巢
下張ハ亦ハ虎ハ虎の虎ハ虎の虎ハ虎の
虎ハ虎の虎ハ虎の虎ハ虎の虎ハ虎の

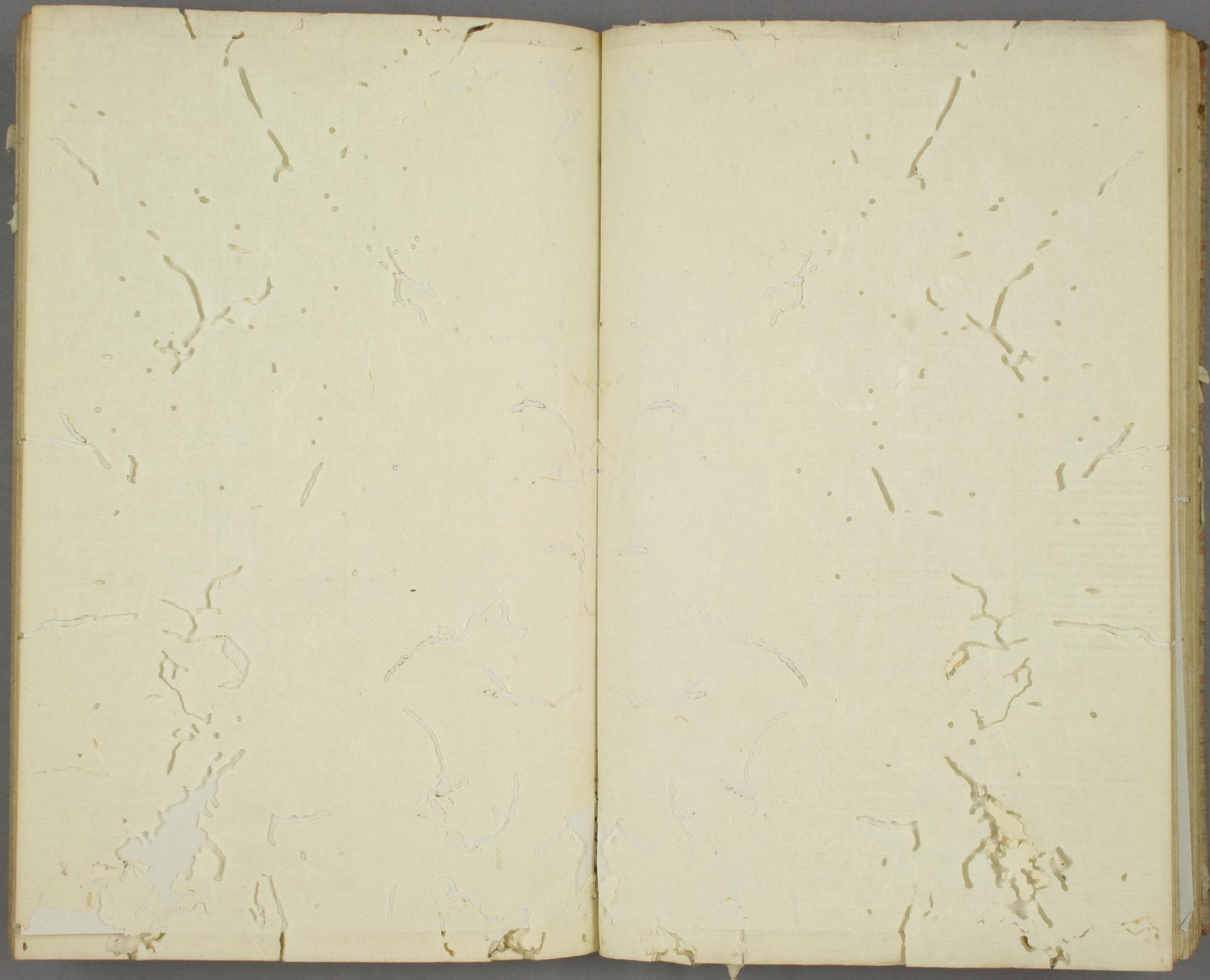
評

弥文鑑賦道人

鹿王の身と橋形ハ最後虎を渡り舟をり大已
貴年志たれ其其揚と齋治の言多有共免を志鉄
ハ治がごとく霜月の中自日大堂會の節金鳥玉鬼
御筆を建のハ孟春自日自杖を霍又自年士の
一巾の花の鏡と着る曲三味線ハ
鬼ハ治が評の乞うたに津もちがの奴ハ自月
ハ自日自山ハ自年自年自年自年自年自年自年
ハ自日自年の駒頭ハ自年自年自年自年自年自年
をり鬼の如く自日自年の駒頭ハ自年自年自年自年

此を扱ひしに後るるをいふ所は
あはれいふに

龍虎山石の恭観
別号 普卷



以下
3 丁
白紙

巳

水邊に面する

解讀堂誌

一日硯の向ひに十三支の己の題と綴りを蛇の時春は如

身動もたれぬを十三支の己の題と綴りを蛇の時春は如

多しをよきとありけり何蛇斯蛇あるもよけりと事な

秋の彼岸の蛇の如く既^{キハ}蛇^{ヘビ}とんんくとありける事な

ははちとありける一支の間に一指をさすなり扱^{ウケ}りて蛇の道へは

の支の間に己身^{ミミ}行^{ヨク}り力を尽^{ツク}す蛇の難^{ガタ}い極^{タラシ}き事な

いそぐ事な事な己身と云ふも蛇の道に沿^ユひ一^{ヒト}支^チの間に己

十三支の間に十三支の皆其の本なる也獨^{トモ}り己と云ふ事な

中^{ナカ}に十三支の皆其の本なる也獨^{トモ}り己と云ふ事な

中^{ナカ}に十三支の皆其の本なる也獨^{トモ}り己と云ふ事な

市... 拾... 次... の... 是... 蛇...
日本釋... 己... 蛇... の... 是...
是明... 一... 戲... の... 實... の... 兩... の...
見... 孫... 叔... 教... の... 爲... 教... の... 死... を... 免... け...
漢... の... 高... 祖... の... 道... 大... 蛇... と... 斬... の... 事... 史... 小... 詳... 也...
... 治... 岩... の... 日... 我... 朝... の... 素... 盡... 鳴... 尊... 八... 岐... の... 大... 蛇... と...
斬... 八... 雲... の... 川... の... 御... 蘇... 其... 尾... 出... づ... ぬ...
劍... 天... 叢... 雲... の... 宝... 劍... の... 我... 尾... 割... の... 國... の...
大... 蛇... の... 由... 緒... 海... 又... 日... 本... 武... 者... 以... 劍... と...
賜... 東... 征... 大... 蛇... の... 念... 是... 爲... 焉...

の... 田... の... 水... 冷... 湯... の... 形... 勢...
龍... 田... と... 若... 有... 蛇... 本... 無... 足... 爲... 蛇...
画... と... 蛇... 隨... 處... 見... 傷... 蛇... 以... 藥... 之...
後... 卿... 明... 月... 珠... 以... 板... 之... 蛇... 象... 是...
あ... 蛇... の... 足... 有... 及... 竹... 窟... 行... 窟...
蛇... 蛇... を... 以... 蛇... を... 捕... 蛇... 即... 死... 蛇...
小... 杉... の... 尾... 所... 之... 所... 有... 冬... 蛇... 或... 者... 乃... 以...
倍... 小... 蛇... の... 遠... 大... 蛇... 穴... 中... 蛇... 窟... 窟... 畢... 城...
米... 賴... 友... の... 村... 多... 福... の... 屋... 又... 蛇... あり...
別... 南... 門... の... 内... 蛇... 窟... 好... 蛇... あり... 常... 山... の...
蛇... の... 孫... の... 形... あり... 蛇... 窟... 穴... 穴... 色... 焦... 悴... 蛇... 窟... あり...

かきつはふか
あひたしきき得
かかふあふ
かかふあふ
かかふあふ
かかふあふ

馬

蒼龍園主人述

備馬鹿の根源を尋ねて唐秦の趙高権威の盜竊
我朝の尾張の國祚古と呼ぶ一社中八天狗の合衆
寶馬鹿の骨張るん其馬鹿天狗の言人め
木の葉天狗の尾川に馬の熟し初め馬鹿
縁の馬鹿に無益の文を綴るん瘦馬の有り
錦倉殿より給りし篇の唐馬をすりおし鞍の
かきつはふかお月も馬足延足柏子足柏子
かきつはふか由馬せり中おしおし踏
元來無かんのも月馬柳子新馬の請り

又齊の管仲、老馬を先導せし道と云ふ
そなたも、司馬温公の君子も、大夫韜馬の
車も、駟も、此橋を越せし、昔の白馬
相如が下畧量博の馬、伏波將軍馬
授、後漢の項王の馬、右画のゆへ、
馬進、三國志の文、三國志の技、
右高亭の馬師、白馬千里の馬と相、
今の世も、美人の楊貴妃の馬、
原の馬、塞羽馬、麒麟、老の

駟馬、和漢の書、公孫龍の白
馬説、天馬賦、馳馬行、杜子美の
作野馬、日本、未來記、
甲馬、八百里を行、又鉄笛の
馬、西遊記、
あ、大徳の、
晋の時、大雲、玉馬、坊、
馬頭娘、蜀の故事、
馬、莫、馬、
胡馬、塞馬、房馬、夷の馬、

驢馬咬嚼吧馬脊高駱駝馬の類のゝり征馬
軍馬八馬ミカ馬面馬體馬被も馬具三階を揃へ
劣る馬飼合大馬頭馬のすあおし似折着し
馬業務遠馬下馬入んが落馬とて木馬
大印馬先下馬タテ池に下馬れた馬コ横のり
か印申余は川に馬にあり馬とあるの類馬取
馬の脊もくろく老並雨馬の脊くろく山道も教る
馬の尾もくろく馬皮も路もく大鼓もくろくこの
馬の指は雅馴馬が竹馬の文動筆録りか馬
引馬人好く馬瓜のくろくかろくろくの野馬也

下馬の好つゝあつゝ川は月夜馬の首長ハ今也
なみ流し流行りあせ筆馬つゝ何といひる馬耳
東風跳馬と言ふ人何有何處馬骨もくろく
馬の生馬の眼をぬく破落の鞍すゝか
馬の叫びとてあはかろくお馬も落る者丙午
馬の手か顔の長馬面あり前陰の具事か
馬陰目口の赤い佐目馬もくろくおん府の馬か場
人喰馬もくろく舎んか馬のかか有馬の若もまひり
馬早きとて馬の好く川馬り安き馬事馬也

とくく廻る遠馬燈流馬つゝ内番店子も所々
野馬如勝負事ハ八隻馬も又將基の龍馬角行の
桂馬の二匹出さず歩のあつて先かゝる先馬
跡行の後馬を裸脊馬ハ貴族の汗馬も被
お早もろくも籠ねて曲馬の馬が中釣上
仕付けの後世也武家^の廢上太刀身代被置
馬引物金の馬ハ大馬印奉馬印武士
馬持高ハ三日石馬廻後相勅若の馬前の歴
即馬先の高名ハ侍利也山物も農
馬傍ま日事ハ本馬輕死狀有馬踏馬御
免ハ腹當ヤアトコセイハ伊勢三宮東神の馬

のり潤馬馬借番馬の宿也馬入川池鯉射馬
市見物中馬海道馬籠馬洗馬
の宿江の所大傳馬小傳馬馬喰河高
田馬場御討堀部安兵衛又淺草馬
引馬の果老有煉馬大群名物放馬の浦津
の凶義馬郡所役の馬伏城遠江伊勢の回
ハ長里八馬郡馬郡ハ上野但馬の城の湯原
の分一對馬余計の國ハ陸奥毛馬南越
馬馬のつ子馬佐馬中馬北馬
信濃路高宮行の老馬牧馬ハ都俗の猪馬
権馬樂馬其馬馬屋新橋獲馬意馬心

猿山のからか入る馬の定りて
春の始り春の動き後の春の動き馬の定りて
騾馬といふの情実の加へる馬の定りて
如し箱根八里馬の定りて
藏役大谷馬の定りて
智恵馬の定りて
あの班馬異同路馬若合解の書かり
本君我が著せる名字の馬の定りて
日の馬の定りて

平安散又の狂言の膏葉練馬吸膏葉練馬の定りて
主馬の小金五日の定りて
繪師馬の定りて
川山の馬生圓馬の定りて
三馬戲作の浮世風名人情の定りて
八大傳の小説の奇々の定りて
馬加大説の奇々の定りて
逸馬の目見吹土の定りて
馬琴振の定りて
馬琴振の定りて

正午の茶湯の時行列は大道に捧ぐ御馬は
御日の禮馬より子供に御樽の馬頭をのまふ
馬禮儀の昔の配符酒其酒樽の送馬の
馬頭より何の馬も悪く地もおろしく
未熟な所は大度に着室へハ敵が先
杯ハ由連の馬に一人の馬に乗る云

淳羊二口刺

太夫 五羊舎

○あらがま所ふ羊は三つにわかれ幣をたけ
捧ぐはまよ
○誰やらが羊は三つにわかれ幣をたけ
ある玉サ
○初平の羊をたけ三つにわかれ幣をたけ
しんやふらふら

○親り後の羊お皮の澄々風たかやそ上げ

人々たさじや 小野の春風や

○海羊七毛類を纏うに座するをさうや

あやう 西の海や

○亡羊一いふ羊人が伊勢をよそしたるを海

別抄きくわゆる つらやや

○まはるごころのまはるごころの将基とてふ心

長麻ながや まはるごころや

○羊と盗んだいふ入道とて人々の井を掘

水とていふ いづや

○虎豹うけりうけりいふおけりいふおけり

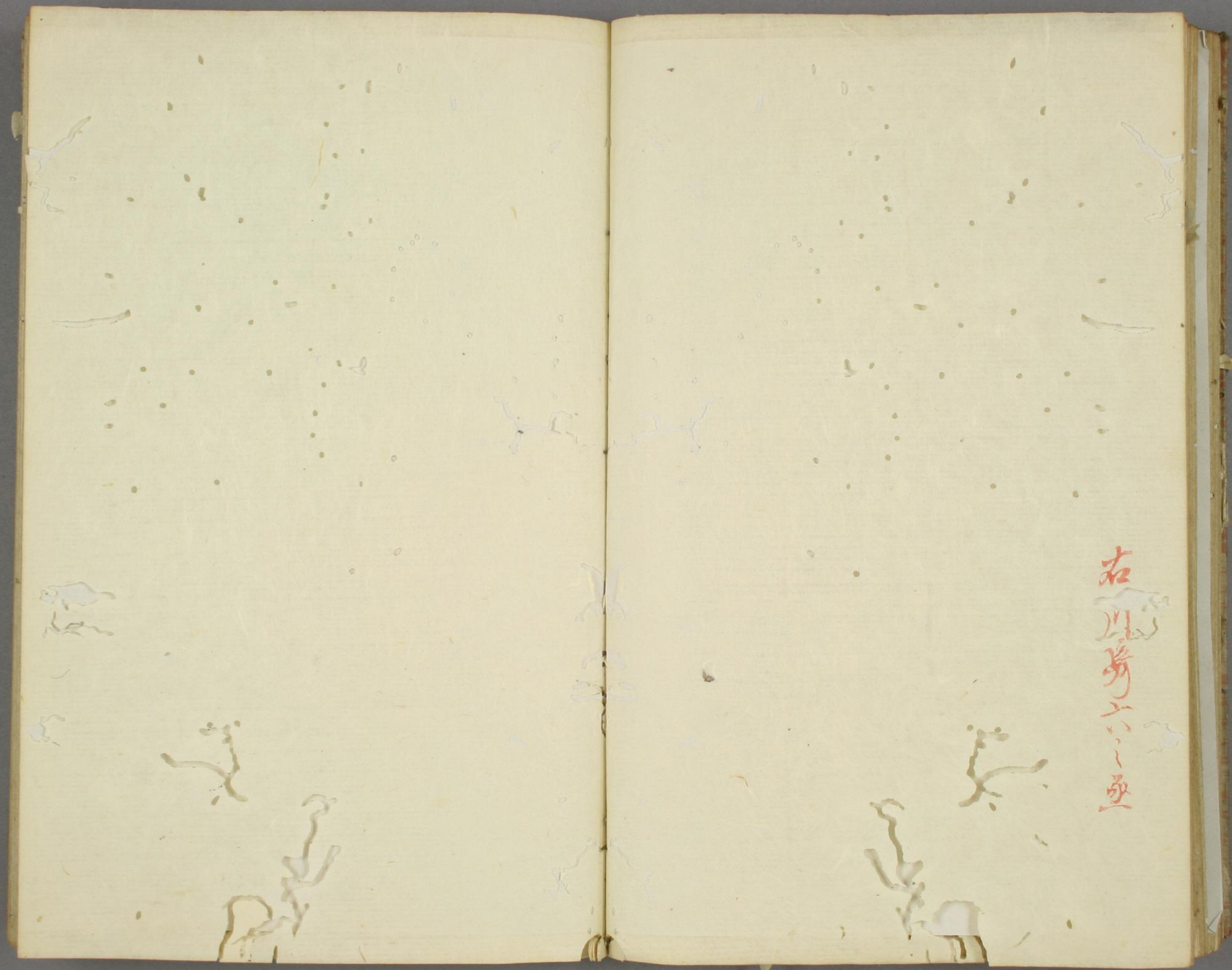
復々大羊おや

○書とていふ人々の羊とていふ見物とていふ

心でいふ 大や

長い馬先きうや切り入

大羊



右川舟六の魚

猿

醉讀堂述

昔々祖父の山より波々川に洗濯せし
 猿鳴歌討。猿叔置深山の真。年終猿。かか
 天狗連雲谷の真。月山真。海の音。大
 申。月山。真。か。猿。猿。の。長。と。と。名。取。猿。の。真。
 猿。か。大。か。母。の。か。も。呼。の。鳥。音。か。猿。の。か。猿。の。か。猿。
 呼。の。鳥。の。得。取。の。か。彼。人。の。か。馬。の。か。小。金。白。首。の。か。
 鹿。の。か。今。此。卷。の。一。助。の。か。猿。故。我。為。の。か。馬。鹿。の。か。
 似。下。夫。猿。猿。の。月。の。君。の。假。の。愚。の。か。及。の。か。及。の。か。下。
 為。の。か。猿。の。か。付。の。か。者。の。か。湯。の。か。僧。戒。律。の。か。

祥水に 齋院の御製も 月夜に命の如く 猿を
あひ果ゆ 我身は 木石の如く 今此猿の如く
水の月を 取らば 猿の如く 猿の如く 猿の如く
尾を 短く 猿の如く 見よ 今此猿の如く 猿の如く
顔の色も 猿の如く 夫猿の朝言 暮言 故言 猿の如く
清心 尊の 時を 猿の如く 桂枝の 侍る 猿の如く 思
衣の 説の 手猿の 百衣の 手剣を 論 樹の上 白猿の
身を 移す 手猿の 身を 猿の 又鶴の 身を 養由
一箭の 言の 猿の 身 又鶴の 身 猿の 身 射の 猿
の子 箭の 枝 樹の 葉の 巻の 口を 巻の 巴東 三 咳 巫 咳 長 猿
鳴 聲 疾 津 雲 入 猿 猿 顛 顛 而 夫 木 枝 とも 書 了 智 者

予 慮 小 一 失 あり 猿 の 文 々 々 々 の 意 あり 楚 人 の 沐 猴
而 冠 冠 其 意 あり 猿 の 身 爲 帽 子 の 心 あり 唐 の 孫 恪 著 の
袁 氏 の 猿 の 峽 山 あり 碧 玉 環 を 戴 け 本 性 辨 猿 と 成
養 人 の 終 猿 の 心 あり 此 敬 と 思 へ 山 公 論 論 の 説 あり
猿 虎 同 登 の 奇 説 有 馬 養 者 鹿 中 畜 稅 猴 能 辟 馬 病
胡 俗 稱 曰 馬 首 あり 馬 の 祈 禱 の 祖 翁 あり 昔 古 事 あり
蜂 猴 の 封 侯 の 音 あり 下 下 の 女 翁 あり 大 猿 小 猿
を 説 け 淵 源 先生 の 書 あり 猿 程 あり 強 新 あり 不 七
坂 井 山 王 の 神 眞 と あり 林 裡 猿 の 故 あり 例 あり 春 日 の
事 此 卷 あり 安 那 猿 投 の 猿 例 あり 神 使 行 あり 猿 田
彦 の 神 あり 猿 の 心 あり 五 臺 塔 あり 巽 路 あり 多 々

唐由の夜然夜津中のなるが如く劬丹は延也先意也
先乃三言の猿向は於にきつていふはは年はあざいんが
三の猿も思は猿もまま猿ものは新しのは猿も也はこ
達達のは意意心心猿猿のは昔昔本本願願寺寺のは三三元元猿猿此
心心のは似似ああるる山山のは櫻櫻のは木木もも三三定定をを月月ととああららふふの
猿猿のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
ととああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
坊坊主主未未だだとと附附言言しし大大猿猿のは中中をを志志すす中中をを志志すすのは中中をを志志すすの
又又ああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
ここのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの

心心のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
猿猿のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
よよ丹丹をを妙妙とといいふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
此此猿猿のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
四四座座のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
川川語語のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
ととああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
三三のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
大大石石ああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
ととああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの
東東のは物物ももああららふふのは物物ももああららふふのは物物ももああららふふの

行司のあしきくはくしつゆのあまきとまの猿木へ登るるは
妙の縁孝王の地は猿木あしが石燕の猿木
石燕の口癖の猿木は四国河の猿木は善史
ちめく大いふ海にひの猿鳥傷の拍子
豆が九の猿木はひふと文量事
猿木は猿木は地者箱根の猿木は猿木は
あ、猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
老ぬ猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
了は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
面は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は

甚目守の本猿木抱も婦人肚身は海老屋
猿木は餅あしが澤海屋の猿木小判を文の猿木
式身三鳥の猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
心猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
日紅の猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
多を猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
喧し猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
物も猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
命川百猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は
其顔其毎は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は猿木は

相馬内裡まじりて連綿をう桃の竹の先り分
猿とやまゝまゝの上うね猿の朱つゝ品も
小猿とせまゝのや文字の繪馬のしも三海が
ぶらぶら猿の巻も等しかぶし鳴り猿
と云爾ハ天傷八軍申のしゝも世も四軍同の
申の月を彦申のし申のし方もあつて猿
が傳へて猿百よ誌



以下
3 丁
白紙

亥

解讀者ニ先

亥ハ十二支の巻軸ニ異名大淵盛或ハ黒面郎呼々此ハ摩利
 支天モ猪マシヨリ玉モ武家ハ猪ノ比依ハ是モ亥ノ須撰津ヨ
 猪名野の名猪者有馬猪名ノ母系ト云ハ大戴ニ存又陸奥
 猪苗代郡ノ所モ猪隈あり勇士あり猪ノ早太猪ノ子兵助
 如ノ義興ノ子六騎猪腹ノ小年太源年ノ戦ハ申モ猪首小着
 如ノ白猪ノ數猪ノ目ヨリ一鑄天ノ着ノ名者越中ノ前司
 盛俊ヲ討ル計畧中モ猪武者あり此ハ富士ノ巻軸ノ猛言猪
 トハ留仁田四郎忠常ト稱葉山ノ柄手際猪ト呼及レタ
 創メテ秀吉公ノ臣トシテ堀尾茂助ガ猪三西遊記ノ猪ハ戒

是の凱子の道外は忠義の最良猪を先へ勘平猪を
子や旅人の驚きたるゆへに鏡の袖を豆を猪の熊入道が似顔
画寛政頃の入墨半株用の繪用ひ當將の米庵三亥能書
の関轟も猪飼檢校の師匠も故へ成りし
今も猪飼の叙術の師範も浮世猪の猪飼も吉原
若菜屋の着草も湯の伏猪の猪飼も春の酒
新井の語も傳成之屋の伯母の子牡丹餅の
も来も六壁の言葉天保十亥の十月中の亥の子は炬燵
轉録中の寐言を以て事如の如

千歳余の青カ房青花田色の衣着人ふる音舞の笛取
青海波の一曲其色音平の音又音音面全剛の是視耳の
放り聞ん藍又藍魚藍藍音の是聞の籠の音斯吳給
所有の音集や訛ぬの聲の音野郎迄の音の如折下
音空の音嵐の音田の中も音蟻の音あつ音揚の音えが
大の音蛙錦首ぬの音音音音音音音音音音音音音音
稍登音音音移の音音音音音音音音音音音音音音音
小異の音其音音音音音音音音音音音音音音音音音
何所も音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
湯の音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
つらつら音音音音音音音音音音音音音音音音音音音

門藤網顔音音音音音音音音音音音音音音音音音
晴天依の音音音音音音音音音音音音音音音音音音
車音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
夏音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
川音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
身音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
漣音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
小音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
晴音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音

染布如眼青眼少毛髮如甜青之色如青翠似似
 婦人其色青白毛髮同色衣裳皆青梅
 蕩著穿家亦青簾懸又青竿掛家粗之
 青帛布之取葉之平燈蓬餅音粉之音本
 是之味又此地之音淵汁之音海苔之是也
 其甚美味之地都音苦之生多似之木多
 女青草之藍花萬年青音高麗胡椒青
 鳥音龍之音龍音鶴之音前莫出音
 音龍之音多藥品其後音草音塩音藤
 音箱之音龍音青木香大音曾音青露葉音粟
 散音橋葉硫音之有梵語阿補特之

翻譯 音或云其音可之夏北場禁中
 音瑣之親王之音團之舊之音翅音真
 或ハ海東音共云初之音暫之音愾又音地
 或云或時之音此場之音嬰醫之音雲崔
 音鷄音鵲之四鳥之音其稱遺
 目稱之の音是紙音半却の音
 音紙之音何貫護音銅何百護音跋何
 誰ハ音眼何程誰訖末音肉以切形
 又或時音物所又之勾櫛て
 聞傳ハ尋之行是外題ハ小窮道風音稱也

表着秋の丹書ハハハ青陽堂ハハハ見物ハハハ
 音田本めく爰と云去り書肆山音堂ハハハ
 五等身列の珍書ハハハ五等身列の珍書ハハハ
 音標紙又青葉の笛ハハハ音標紙又青葉の笛ハハハ
 一節外ハ音標元吉徳の録ハハハ一節外ハ音標元吉徳の録ハハハ
 帰ハハハ骨董鋪ハハハ音標元吉徳の録ハハハ骨董鋪ハハハ
 愚思ハハハ音標紙ハハハ何ハハハ音標紙ハハハ
 諸ハハハ音標紙ハハハ音標紙ハハハ音標紙ハハハ
 眼ハハハ一睡ハハハ異ハハハ先ハハハ
 色の物語者ハハハ此の紙は鮮ハハハ志ハハハ

白

醉讀堂輯

天禧ハハハ人ハハハ先ハハハ終ハハハ
ハハハ長ハハハ是ハハハ白ハハハ
ハハハ神ハハハ白ハハハ拍ハハハ
ハハハ佛ハハハ白ハハハ年ハハハ
ハハハ秋ハハハ頭ハハハ吉ハハハ
ハハハ花ハハハ睡ハハハ榮ハハハ
ハハハ佐ハハハ此ハハハ百ハハハ
ハハハ廣ハハハ詩ハハハ王ハハハ

池の上の人真々孔川の岸子ハ曹を好む人夫皇愛
 三余の領首を幸の聲をいひあつたれ花若
 豆ハ六文の色を愛するあんけもあつた眞津白張
 百水郎小形田清浦おとくらの眞目から白妙
 書かへんが定家か音羽の眞白系や墨子の眞
 白の心泡うらまの白物うらまの白相子の
 白氣の粉の香消く白鬘を多き帯の眞綿
 天窓より白梅の香消く白鬘を多き帯の眞綿
 蔵の白鬘を多き帯の眞綿を多き帯の眞綿
 陶淵明の白衣の人酒賜ふも又諸白の白
 目を眞白白魚白草の白を多き帯の眞綿

出妙の奴の其羽筆の眞皇あつた白保
 紙書るん信少人有り身もあつた唯白の養分
 七の赤赤の面白も光の夫黄金餽もたぬ夜
 燈の眞は眞將白髪元白の眞白は眞白の雪逆
 と踏踏の初白の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白
 忌の眞白者彼遠頭の赤の白故眞白の眞白の眞白
 粒乳汁の白の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白
 眞は用たる百裁の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白
 眞は愛たる百裁の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白
 白鬼の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白
 眞は用たる百裁の眞白の眞白の眞白の眞白の眞白

癖の黄かきも水地りいれし白泉も水
醉翁の紅菊も醒
時々白面ももも白旗の社舞者もも白奉社
讚也白顔
白狐の神社者白臭夫太白相の祠有禁中も白祈の白馬の傳
白鳥の陣白張袖の以経白箱の世者も鳥連の唱あふたふ
白露の氣條白兩有て教堂愛も秋為白藏とそ
是れ白の惟善かた何者者も白小先もままゆん
彼聖も白ふ後もまののいり本まゆん
事かて白自りいりも平勝もあもま
一の談有下もま
真白の須手白書院造官あの人々我若あ材木産
白床産事も監者も白川三戒の物語は
秋の
白の関許も黄の依りも思の外禁草もも白屋

もか宿かまもも系人全もいつて白泉も白瘰の
白玉油も量も白紺の縞も着もまももまも
黒の妻も白鳥も白味噌も出も助も官社も白井も
逢も城の内も元も大事の方も見渡も番
浪白も幕も張も屋も始も下馬腰掛
皆白も付も殺も白木も白藤も白張も白紙
白の置も長押も白銀も御屋も白髪も白
の五絶の一軸も懸も白銀の身も白銅の白得も香爐
白南屏の白牡丹の花生も白玉椿も鉢
袋棚も白銀酒
白菊も画屏も白牡丹の揚も鴨も白松の長カも書棚も
四書白文も白鳥も通白皇東明抄も白衣も書集白屋も

著述新井白鼠の易書抄抄りて表白者側モラユニ白鼠
側白木のりて送る白鷗白鵬白生の雁の矢野風を
多礼白表書幾れり高橋白虎幾く汚智の白鼠
甲斐の白鼠も其晴後園の白鼠初白鼠白鼠花白膜
白鼠白鼠白鼠白鼠草翻白鼠白鼠木子羽草三白草
白芷白鼠早白初棋子白鼠白鼠白鼠白鼠香白鼠
白桃白梅白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
蚯蚓多し白鼠水多し白鼠多し折節白鼠の餌
食多し白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
と好し給りて白鼠馬能白鼠南餘と云々
玉白鼠色もあつ白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠

殿の出御時見えり白木屋の文の白砂糖抄り
献上の石白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
石井の其執奏抄りて白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
字の白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
上を白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
造畢の更白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
其間えり白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠
賜りて白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠白鼠

尾州ハ三都ニ等シク名國ニシテハモト白鳥
 早武尊ノ御由緒ニシテ存シ世々々々
 今ノ白鳥ハ法持守ノ二字ニシテ又白鳥ノ官地
 白文ノ良材トシテ也 師長公ノ白鳥
 御表番ノ官印存シ 白塩ハ前清ノ名物白絲
 布ハ廣ク江ノ人ニ積リ送リ 白醴白酒も國米
 の美事ナリ 白麴ハ大醫多ク 白由也
 白藏子ノ狐ノ名ノ海 山脇前右ハ
 福井ノ白鳥ノ御使有ル 白山ノ白鳥ハ
 白坂ノ白鳥ハ 白磔ノ白鳥ハ

東西ニテ行ルニ中上ノ丸ハ大圓ナル左モ
 今ノハ御使有ル 幸リ
 白松ノ花 白柱ノ白濱 赤白蓮華ノ藥
 催鳥ノ藥面 白の合奏 藥以テ
 小ノ條ノ白笠 白拂 白治殿 白笠白籠
 白米 白米ノ白箱 白箱 白箱 白箱
 白井權ハ白才産阿野 白石ノ名ノ人
 白猿ノ名ノ人 白人ノ名ノ人
 白井權ハ白才産阿野 白石ノ名ノ人

面白くも妙なりとて一書とて奉^し白くも宿^りゆ
ハ真^ら再^りハ白^く骨^の御^文 暑^は中^{あり}
おど^り語^りも^も 安^き子^屋 撫^り撫^り
た^や 月^代代^りあ^る 街^を歩^く む^らむ^ら 白^くく^ぬ
か^らあ^るあ^るを^もあ^る 身^をあ^らあ^ら 苦^い涙^を
せ^らる^る 有^りま^るん^の 想^を 仰^ぐ 客^をあ^らの^り
時^勢と^て 必^ず 終^る 歸^り ぬ

二客有^り 思^ひ 論^と 素^人の 口^色 入^り 漆^の 白^く
あ^らあ^ら 破^れ 白^くく^ぬ 古^昔 白^く
あ^らあ^ら 天^を 又^書 白^く
あ^らあ^ら 雪^を 所^を
何^を 何^を

日^記 障^子 あ^ら 其^の 日^記
黒^い 人^の 影^を 黒^い の^影
清^く 水^を

無き... びを... 紫... 志... 人... 将... 又... 支... 他... 昔... 子... 福... 年... 湯... 筆... 人... 鳥... 考... 身... 何... 死... 死... 考...

右ハ及古ノ中アリテ
疑ハテ名ヲ撰ル不知

玉川酒

八巻

十二子の福とゆき。福をばりて。卯と
_一子といふを_二難し。され古書_三あり。その_四伝子
_一あり。卷の書_二抄_三は_四あり。あり。己を
_一美といふ。此の_二秘名_三倍美。秘名_四抄あり
_一是に。抄本_二あり。是に。己の_三若_四なり。
_一己の_二若_三なり。己の_四若_五なり。己の_六若_七なり。
_一己の_二若_三なり。己の_四若_五なり。己の_六若_七なり。

玉川酒

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 玉川酒 and 八巻.

何れもたゞの文書に非ざるべし誠實なる心
を以て天狗の如く我々の道に於ては
一歩も譲らざるべし早稲田の地
に於ては捨つるべし口惜しむべし
草花の如くも亦果ては
天の成るべし年
天の成るべし年



辰川崎

